
東方恋甘味

小箱はと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方恋甘味

【Nコード】

N8549J

【作者名】

小箱はと

【あらすじ】

ある妖怪が誰かをからかう話。外の世界に触れた幻想のお話です。

ある日の昼下がり、こんなことを聞いた。

珍しく今日ここにはコイツしか居ない。いつもはほかにも居るのに。

「ヴァレンタイン？」

「なんで妙に発音いいのよ。バレンタインね」

いままで聞いたことのない言葉。コイツが言ってるんだから外の世界のことだろう。

最近横文字多いな、幻想郷。とかくだらないことを考えながら適当に耳を傾ける。

そもそもなんでこいつは幻想郷に外の世界のコトをこつも持ち込んでくるのか。

幻想郷は忘れ去られたモノの集う場所。それだけでいいじゃない。

こんなんだから最近では外来人が多くなつて……

「ねえ、ちよつと。聞いてる？」

「ん、ごめん。あんまり聞いてなかった」

「はあ、まったく。もう一度説明するわよ？」

この胡散臭いによるとヴァレ、バレンタインとはオンナノコが好きな人に『チョコレート』とかいうのを渡す日らしい。

なんか外の世界では恋人が多く生まれると同時にテロが起きたりするのだとか。

テロってなに？と聞くとこいつは「何かに抗議したりするための破壊活動ってところかしら」と答えた。ああなるほど。妬ましいわけだ、恋人が。これは地下にいるあの緑の目をした妖怪が出てきてもおかしくはない。なんて。

結局私には関係ないだろう。外の世界のことなんて。

と考えているとコイツは何言ってるの、とそんな顔。

あんたはいつさと妖怪になったんだ。一人一種族だったろ、確か。「あなたも女の子なんだから、一人くらい好きな人居ないわけ？」

「……………」

「ふふ、沈黙は肯定よ？」

「……居ない、わよ」

「そうかあ、それは残念ね。貴女も恋ぐらいはしてみればいいのに」私の立場上そんなことは難しい。それは貴女もわかってるでしょうに。

「そう？私はそう思わないわよ？」

「そういうあんたはどうなのよ」

仕返し。コイツ実は恋愛未経験だったりするんじゃないか。それだつたら思いつきりいじめてやろう、と考えていると

「居るわよ？好きな人くらいは。いまどこで何してるかなあ。大方もう居ないだろうけど」

居たんだ。ちくしょう。なんかむかつく。

「ああ、よかつたわあ。もうあの人にはうふうふうふ」

…… やめてほしい。貴女が笑ってるのはなんかいつもちがう感じで、そんな笑いをされると、反応に困る。っていうか気持ち悪いどころか気味悪いわ。

「聞きたい？聞きたい？ねえ聞きたい？私と婚約したひとの話」

「やめておく」

あんたがそんなに自分から話したがってるのははじめて見た。なんかいつても人をおちよくって笑うだけのこいつがそんなに話したがってるのはなんかアレだ。

「で、あなたの様子だと好き、ってほどでもないけど気になってる人はいるみたいね？」

「……………」

うるさい。この、……なんて言うんだろこっこの。

でも、実際気になる奴居る。

どうしよう、こいつの口車に乗るのもいやだ。ってかコイツがやだ。ああ、でもこんなこと話しているとあいつの顔が頭に浮かぶ。

直接かわったことはそれほどないだろう。でも、少し探せばすぐ

みつかるハズだ。

ああ、もう、と頭を振って振り払いたい頭の中。隣から「青春ねえ。懐かしいわぁ」と声が聞こえる。コイツぶん殴りてえ。

でも、たまにはこいつに頼るのも一興だろう。それに、楽しくなるかもしれない。

別に私があの人に振り向いてほしいとかそんなんじゃない。ただ面白くなりそうだから、それだけだ。今後生活が充実するかもしれない。

これは自分のため。誰のためでもない自分のための行動。

「声、でてるわよ」

「……………っ！」

ああ、かわいいわぁ。とこいつが言う。ああ、なにその微笑み。やめてちょうだい。

「つんでれゝつんつんでれゝ」

ああ、なんかいいだしたコイツ。もとからくるってるけど更に壊れた。新しいネジを購入してしめなおすべきだ。永く生き過ぎたのだこいつは。老朽化がはげしい。

まずツンデレってなんだ。また外の世界の言葉か。わかんないよそんなの。

「……………貴女に頼るのは、今回だけ」

「あら？いつでも頼っていいのよ？私はあなたを気に入ってるし」
「そうなのか、いいよ。そんなのでなくても。」

「じゃあ、はい、コレ」

「……………コレが？」

「そう、チヨコレート。告白しにいったらっしやい」

そんなんじゃない、と否定するとコイツはあらら、違わないでしょ？と言ってきた。

確かにこっちが間違っているのだが、なんかむかついてしまったので、否定してしまった。

「中身、みちゃダメよ？包装崩れちゃうし」

正直見たかったけれど、ぐっと我慢して渡された紙袋を胸に抱く。
コレ、バレンタイン来るまでしっかり保存しとかなきゃ。

「ああ、バレンタインって、今日だからね？」

「……は？」

「なんで今日この話をしたと思ってるの？」

「この、馬鹿」

ふふ、ごめんね。と言って、そいつは姿を消した。

残ったのは紙袋と私。

……行くしか、ないよね。

そう決意した私は腰をあげて歩き出す。

まったく。私らしくもない。

心の中で、自分を笑った。

さて、あの人は今日のイベントを知っているだろうか。

知らないなら、押しつけて帰ってこよう。

オマケ

「ナニ、これ」

飛び始めて、彼女は気付いたようだ。

馬鹿ねえ、私がコレだけで終わらせると思う？

彼女の様子を覗いていた私はほくそ笑んでいた。

「相変わらず、趣味が悪いですね。まったく」

「いいじゃない。コレくらい」

呆れられるのもいつものこと。もう慣れた。

（じゃあ、がんばってね）

事態を察してあわて始めた彼女を見て、そう心の中でつぶやいた。

彼女の前にある大木、そこには張り紙があった。

内容は

「外の世界の文化を楽しみませんか？二月十四日、聖バレンタイン

「デイ」

それと、バレンタインについて詳しいことが書かれてあった。

「たまには文屋も役に立つわねえ」

「あんのクソ妖怪iiiiiiiiiii!?!」

（後書き）

なんか主人公　　っぽいなあ、とかどう考えても　　だろ、とか思
った人。

ぶっっちゃけ誰だか決めてません。妖怪は間違いなくあの人ですが。

ちなみに私の中では霊夢っぽく。だからそれに近くなっちゃってる
かもしれませんね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8549j/>

東方恋甘味

2010年10月21日23時55分発行